柔らかな道具主義

# Ⅰ

左右田はリッカートの行為を意味づける形式としての価値、つまり「文化価値」の考えを受け継いで形式(この言い方には若干の修正・変更を加える)としての価値を、存在に対置せしめる。もとより理性的な真善美聖同等の派生態としてのみ文化価値は考えられる。つまり個々の領域に応じて、それにふさわしい内容が要求されるのであり、畢竟文化価値は、〔存在に対しては形式とはいえ〕形式-内容からなる形象(ゲビルデ)である。

例えば学問、倫理、芸術、宗教にとどまらず、政治、法律、経済、技術、言語、教育それぞれの領域に価値が枚挙されるという儀である。これらに価値序列をつけるのは左右田に言わせれば意味がない。価値は序列的には並列化され、それぞれ固有の意味をもって妥当する。「特殊科学に於ても此の無内容なる其の当為に係はりて概念構成が成し遂げらるゝ際には、又別に一の其の特殊科学に特有なる概念があつて、其の概念が恰も他の凡ての其の學に於ける概念に対しては論理的先天性を具有して居り、之によつて後者は凡て此の先天的概念の色彩を帯びて来なければならないものと思ふ」(「極限としての文化価値」二二○頁、以下同様)。かくして、具象的な貨幣を規制する経済的な固有価値は、特有の内容をもつということになる。これは左右田が経済という現実に依拠して価値を構想した必然的結果である。すなわち経済現象の内在的な意味を理解し、はたまた貨幣という財の意味を解明する一種の世界観が、経済的文化価値だからである。別の面からみれば、経済的価値を論究する経済哲学は、貨幣現象に正対する規範科学であり、かつ経済活動はいかにして可能かを問う認識論とも言える。

――価値を扱う規範科学が何ゆえに認識論と結びつくのかは説明を要するかもしれない。存在の彼岸に妥当する価値から派生したる超越論的規範は、超越論的に主観にかかわり、存在としての貨幣現象＝経済現象を構成する。いわば、貨幣現象＝経済現象の構成のためには、先行する価値規範が不可欠なのである。つまり価値は、つとに塩野谷祐一が説くように、道具主義的に存在にかかわる。すなわち経済に関する世界観・価値観を論点先取することなくしては、経済現象は成立しえない。このことがらは、ある程度パラダイムとしての形式を語ることで、今日的意味をもちうるだろう。つまり存在を認識するなら、形式-内容形象を先取することが必要である、という論点である。実在する存在が彼方にあり、それを対応説的に模写するという仕方では、経済現象に手が届かない。ここで対応説から構成説への理論転換が不可避となる。このことは英米系実証主義が、客観的秩序を志向していたにもかかわらず、その帰趨としては帰納主義の挫折を見、規約主義へと方向転換せざるをえなかったことと合致している。これは何もドイツ観念固有の展開ではない。

ひとまずカントに託していえば、アプリオリな概念が現実を嚮導する。そうした概念の道具主義的構成をまって、はじめて現実は成立しうる。客観的なメカニズムではなく、目的志向的な精神的活動をとおして、対象は人間がつくりあげてゆく。この構成のさい、目的となるのは、一の価値ないし規範であるから、対象の概念的構成はひとえに価値に拠っている。

だが、はたしてこの価値はアプリオリな形式に模してよいものなのだろうか。いや、固有価値を特徴づけるのは、その内容なのではないだろうか。左右田の価値が形式であるという通説を控え目に解し、ここでは道具主義的な概念と現実とのゆるやかな連携を論じたい。塩野谷が言うように、貨幣現象と経済的文化価値は没交渉のようには思われないのである。たしかに左右田は「純粋経済学の概念構成上の嚮導概念としての先天的要素を宣明し、兼ねて此の要素に係はりて経学上の総ての概念が従来の如く実在論的ではなく観念論的に構成せらるべし」(「カント認識論と純理経済学」)と言っている。しかしながら、実在論的でないとは超越的にそうなのであって、超越論的観念論の内部で、経験的実在論は機能うる。そのため、概念構成にあたり後者の実在から実在論的に掣肘をうけるはずである。

一旦、話題を転換して、左右田が影響を受けたリッカートの所知構成――柔らかな道具主義と言うべきもの――を瞥見しよう。

# Ⅱ

リッカートの、所知構成の二系列を簡潔に定式化しておけば、以下のごとくまとめられる。

『認識の対象』系列

1. 経験的に与えられた直観の多様(「知覚」)が有る。知覚表象〔の断片〕に態度決定を及ぼして、「所与性の範疇」を帰属させ、個々の【このもの】が成立する段階(GE2,Kap.5,II.)。リッカートの場合、非論理的質料が想定されていたともいわれる(Rickert, H.,1921,S.53;1924(←1912),S.13.)。判断によって形式が与えられることで、【このもの】が構成される。
2. 【このもの】に「構成的範疇」(因果のカテゴリーはこの次元で働く)が帰属し、「現実」が構成される(GE2,Kap.5,III.)。『認識の対象』第二版(GE2,Kap.5,II/III.第二版以降の諸版でも同様)では【このもの】以後的に「現実」を置いている。つまり【このもの】に「現実」(性)という形式、ならびに「構成的範疇」〔時間、空間、個別的因果性の形式〕が結合して、「現実」が構成される。「所与に客観的現実性の形式を与え、そうして客観的現実を構成する諸カテゴリーを、構成的範疇と名づける」(GE2,S.211.)。
3. 「現実」に普遍的価値が関係して、特定の観点から【客観】（因果法則性はこの次元で働く）を概念媒介的に抽出する。「現実」から【客観】が成立する段階(GE2,Kap.5, IV.)である。認識がなされるなら、多様からの改変[=Umbildung] (GE2,S225-.226.)を被ることになり、「現実」から離れる。「或るしかじかの法則に従っていること」は、認識のあり方に対応したものである。それゆえ、この認識のあり方は「構成的範疇」と区別して「方法論的形式」といわれる。

　この系列では、首尾一貫して超越論的観念論が語られ、「所与」たる非論理的質料は概念構成の彼岸にとどまる。この系列を「堅い道具主義」と仮に呼ぶことにする。

科学分類論系列

これとは別様の議論として、科学分類論系列の所知構成論が有る。本稿では、それが前科学的世界に横たわる、世界観と連関した所与の沃野を論じているとし、積極的に評価したい。それは最基底に現実=所与をおく、概念構成の議論である。ところで学問分類論にわたる批判として、ディルタイは次のように指摘していた。リッカートの現実科学とは歴史学のことである(Dilthey,Bd.24,S.286.Gr.1,S.327からの引用)。それは、内容が普遍的概念からなる自然科学とちがっている。それゆえリッカートは自然科学を勝義の学問とはしなかった。かくのごとく学的概念は、生との対比で虚構と解されることに留意しておきたい。

1. リッカートは「現実」として、意識内容中、特殊なものを考えている。「現実」は模写によって尽くせない(Rickert,H.,1910(←1899), Kap.V.)。以下は「異質性と連続との結合」をとく、リッカートの『文化科学と自然科学』第二版のくだりである(『限界』の多様の考えに通じる。Gr1,S.34/Gr2,S.32を参照のこと)。「連続は、それが同質なら即座に概念によって支配されうるし、異質なものは、私たちがそれを截り出すとき、つまりその連続を非連続へと変化させるとき、理解されうる。こうして学問には、その途として概念構成の二つのものもまた、明らかになる。私たちは、現実すべてに挿し込まれている異質的連続を、同質的連続か、もしくは異質的非連続に変形するのである」(Rickert,H.,1910(←1899),S.33.)。〔この箇所は模写説に引き摺られた第一版、一八九九年には見られない。構成を予期する第二版の論点である。〕
2. 前科学的価値が関係するせいで、構成の主観性が問われる。前科学的個体の概念の成立。この点にわたる議論は 以下の引用を参照されたい(Vgl.Gr1,S.354-355/ Gr2,S.316-317.)。「私たちは、それゆえ、いかなる任意の事物ないし過程それぞれに相応しい個性は、その内容が現実と合致したかたちで、その認識にも到達できないし獲得にも値しない。かくのごとき個性は、十全に規定された諸契機のなかから出てくるものであるし、私たちにとってBedeutungに溢れた〔科学的〕個性とは峻別する必要があり、この通俗的に考えられたものでしかない狭義の個性〔=前科学的概念〕を、普遍的類概念がそうでないがごとく現実ではなきこと、のみならず私たちの現実把握ないし前科学的概念構成の産物であることを、明確にしておかなくてはならない」(Rickert,H.,1905,S.63. 前科学的概念構成については、Gr1,S.379/Gr.2,S.342.)。
3. そののち科学的方法論の検討がなされている。

「科学が研究にたずさわる以前に、むしろ至るところで、すでに概念構成が生じており、把捉と疎遠な現実ではなく、前科学的概念構成の産物を、科学は質料〔=本稿の言う所与〕として見いだすのである」(Rickert,H.,1905,S.62.傍点ゲシュペルト)。かくのごとく前科学的個体は、一般化的方法／個別化的方法という概念構成の所与となる。しかるのち、学的概念構成は、特殊な事物、出来事に普遍的価値を結びつけて(Rickert,H.,1905,S.80.) 、個体概念を構成するのである。

まとめれば、異質的連続という所与に連携するかたちで、価値形式を介した前科学的個体という所与が与えられる。その点で「堅い道具主義」とことなっている。つまり現実に対して概念は掣肘を被るのである。しかもそこから立ち上がる概念は、学的「問いかけ」となる質料(コーヘンのAufgabeを想起されたい)を承けている。前科学的個体は概念構成の産物であり、形式とは無縁でないものの、所与としての役割を担っている。けだしディルタイにおいても、(ディルタイ的な)「所与」とは「連関」に媒介されていた。リッカートの前科学的個体とは、学的認識にとってのディルタイ的な「所与」である。

# Ⅲ

　ここで左右田における規範概念も存在とゆるやかに連動していたことに思い至る。もとより存在と価値は峻別されるべきだが、両者は相互に無関係に存立すべきものではない。いわく「吾等は究極に於て何等かの制限、何等かの意義に於て価値と内容との結合を求むることなくして止み能はぬ」(二一九頁)。というのも、存在は価値概念によって枠づけられているからである。かくのごとく認識の問題に関して、価値から存在への働きかけがある(価値関係)。はたまた、評価作用を基底とした価値は、存在に対して一定の態度をとる(原基的には価値関係は評価作用に還元されるべきことについては、拙著「新カント学派の価値哲学」参照)。しかも、価値や規範はそれ自体としては、存在と一応区別されており、それが後者と係わるためには内容空虚であってはならない。かくして存在と価値とは相互に依存するという側面をもつ。左右田が語る極限概念にしてみても、規範の極限における存在とのかかわりが考えられているのであって、没交渉とはいいがたい。もとより、存在から規範に至るためには、――gapを乗り越える必要があり、そこには――懸隔を想定せざるをえないのだが、段階的な内容充実により存在へと接近できる。ここでカントのエーテル演繹の顰を髣髴させる、〈経済学的概念＝貨幣概念のアプリオリな演繹〉と言うべきものが考えられている(実際、左右田は「エレクトロン」の概念のアプリオリ性に模して語っている。二二三頁)。

　むろん存在と当為は概念的に峻別される。「所謂超越的心理學的方法に於ては其の係はるべき範圍内に於ては当為は一個の純形式であつて此の意義に於ては如何なる方法を以てしても存在より当為を導くことを得ない」(二二五頁)のである。また一面では「価値は一個の形式であつて無内容である」。しかるに「[反対に超越的論理的方法によつて価値を其自身として論ずる場合には、他の諸価値間との関係は当為たる形式として凡て同じであると云ふの理由を以て此の方面より見れば凡て無差別であるが、]他の方面即ち内容の點から見れば區別もせられ、階級もつけられ、比較もせられなければならない」(二二六頁)。つまり超越〔論〕的論理学にあっては、内容上の区別がある。「経済學上の凡ゆる概念即ち経済生活たる存在(Sein)の経済的文化価値なる当為(Sollen)に対する関係を繹ねんとするには、二の異なつた立場を統一の或立場に引き直ほさなければ出来ぬ仕事である。即ち一方は超越的論理的立場によつて経済的文化価値の他文化価値に対する関係地位等を決定して其の内容的制約の性質を明にし」、それのみならず「他方超越的心理的立場に帰つて価値概念又は貨幣概念と此の内容的制約との間に如何なる関係換言すれば如何なる実質的内面的聨絡があるのかと云ふことを見るを要するのである」(二二六-二二七頁、二五五頁参照)。ここにおいて内容的連関が、価値相互間では超越的論理学、存在と価値間では超越的心理学において究明されることが明らかとなった。つまり価値形象の内容的制約を扱うのが前者であり、アプリオリな概念による内容の制約を扱うのが後者である(二二九頁)。

　とはいうものの内容的なgapは考えざるをえないわけで、左右田はこのことを例証するために、数学的な極限概念を持ち出す。すなわち級数が存在内容にあたり、収束値を価値とすれば、存在は価値とぴったり合致することはありえない。これがgap=不断の連続(二三六頁)である。こうした関係は「当為と存在、価値と内容」とに合致する(二三一頁)。このgapはカントの可想界と可感界の、二観点のズレと重ねられる。かくのごとく「Sollen価値は一定の方向を与へられたる内容の極限概念であると云ふならば諸価値は其自身として考へられたる場合に於て夫々内容的制約を許すと云ふことは寧ろ当然と云はざるを得ないと思ふ」(二三九頁)。たとえ其の係はる範囲内に於ては「純形式」止まるにしても(二三九頁)。概念と現実の溝、これを左右田は「思想上の飛躍」(二四○頁)と呼んでいるが、「其の飛躍は一定の与へられたる方向なるものを惑乱せしめ得ざる先天の約束がある、其の到り得べき即ち換言すれば止まらざるべからざる一定の限界が明示されてあらねばならぬ。即ち其の思想上の飛躍には、性質上及び程度上の限界と制約とが先天的に確定せられて居ると云はねばならぬ。果して然らば之を反言すれば其の極限概念あつて初めて凡ての内容に其の一定の方向なるものが与へらるゝものであつて、其の所謂一定の方向なるものは極限概念によつて制約せらるべきである」(二四一頁)。こうして、現実に対してイデアールかつ観念論的な当為が、極限概念として措定される。言い換えれば、極限概念としての「SollenがSeinに対して一定の走るべき方向を与ふるものであり、此の意識に於てSollenが其の凡てのSeinを可能ならしむるものである」(二四一-二四二頁)。「此の如くSollenはSeinに依属する相関関係」(二四二頁、相関関係については二五七頁参照)が存在する。したがって「SeinとSollenとを内的に統一する立場」(二四三頁)が要請される。もしくは「Seinの内にSollenを見、Sollenの内にSeinを見る事」(二四六頁)が必要である。ここで左右田はリッカート・ラスクに棹差し、直接的経験(リッカートなら先に見た異質的連続)からの概念構成に余地を残す(二四八頁)。概念は純然たるアプリオリではありえず、「何等かの意義に於ける材料、素材の側より考ふる場合に於ては先天的なりと称し得又内容によりて制約せらると解し得るのである」(二四八頁)。

　かくて塩野谷の純道具主義的解釈は誤りであることが明らかである。なぜなら存在の側から近づきうる当為としての極限概念は、直接経験と連携する形で内容をもつからである。言い換えれば、当為は内容的実質を抱える仮言命法である。ある意味で現実に掣肘を受けるがゆえに、当為は実質によって左右される「柔らかな〔道具主義としての〕規範性」と言うべきものをもっている。このことは左右田が考えていた規範の規範性が義務論的制約でなかったことを意味する。

このことをセンの規範に関連する叙述に橋渡ししよう。彼は規範の構成契機となる「行為主体中立性」を、以下の三つに区別している(Sen,A.K.,1982, p.22)。「柔らかな規範性」を考えるにさいして、その「行為主体中立性」に対して、価値観は「行為主体相関性」をもつという論点が指針を与えてくれる。当の「行為主体中立性」として、*b*が行為Actするのを*a*が許すことができる、をAf*a*(*b*)(a affirms b to Act)と、おくと、

　「行為者中立性」(DN)　人*i*がこの行為を行ってよいのは、人*j*がこの行為を行うことを人*i*が許すことができる場合、かつその場合に限る。Af*i*(*i*) 　　 Af*i*(*j*)

「観察者中立性」(VN)　人*i*がこの行為を行ってよいのは、人*i*がこの行為を行うことを人

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 行為者相関性(DR) | 観察者相関性(VR) | 自己評価相関性(SR) |
| 統合性尊重(自律性) | × | × | × |
| 連帯尊重 | ○ | × | ○ |
| 統合性責任(義務論) | ○ | ○ | × |
| 連帯目標(主観的価値観) | × | ○ | ○ |
| 目標化された連帯尊重 | ○ | ○ | ○ |

*j*が許すことができる場合、かつその場合に限る。Af*i*(*i*) 　　Af*j*(*i*)

「自己評価中立性」(SN)　人*i*がこの行為を行ってよいのは、人*j*がこの行為を行ってよい場合、かつその場合に限る。Af*i*(*i*) 　 　Af*j*(*j*)

図1 「行為主体相関性」と規範　灰色は狭義の帰結主義(目的合理主義)

DN＆VN⇒SNだからDN,VN,(SR)という組はありえぬ。同様にVN＆SN⇒DNだからVN,SN,(DR) という組はありえぬし、SN&DN⇒VNだからSN,DN, (VR)という組はありえぬ。よってSRのみによっては維持されえないし、DRのみ、もしくはVRのみによっては維持されえない。

したがって義務論的制約はDN・VNが成り立たないにもかかわらず、SNが成り立つ場合に限られる。ということはDN・VN・SNいずれもが成り立たない場合は規範として没概念になるから(普遍的利己主義)、DNのみがなりたつか、VNのみがなりたつ(DNの否定は、VNの否定またはSNの否定を含意する。VNの否定は、DNの否定またはSNの否定を含意する。)もとより、狭義の帰結主義に近い連帯尊重として、左右田の規範を考えられないこともないが、非帰結主義的方向を活かすとしたら、連帯目標のカテゴリーに属するであろう。そこで左右田の「柔らかな規範性」は、その特徴として、「身内にかかわる異なる目標、たとえば自分の子供に対して、恩恵賦与するのに異なる目的をもつ」(Sen,A.K.,1982,p.27)がごとく、観察者相関性をもつ。この目的に関する内容的示唆をもつのが、左右田価値哲学の倫理的特徴である。

この具体的含意は何であろうか。規範はそれを行なう当事者にとっては自律的に守られなくてはならないと当時主体=私は思う。その意味に限って、規範は妥当する(誰かが嘘はつかないなら、他人も嘘をつかなくても当然と自分は思う)。しかるにそれは誰の目から見ても守られるべきものではない。自分は規範を守ろうとも他者にそれを押し付けることはできない(立場によって、嘘をつくべきでないという判断は、観察者によって異なる、要するに嘘をつかずに許される、とだれも要求できない)。つまり絶対守るべき強制性をもたない(これは超越〔論〕的心理学の然るべき帰結である)。もとより、内心の自律として規範は厳然たる意味をもつのだが、規範の実質性・柔らかさが他人に対する拘束性を緩衝するのである。

たとえばこの点に関するカントの立場は好対照を見せる。当為に反してまで、幸福な結果が得られたとしても、それは道徳法則に反したことなのだから、悪であり、しかも現実的な羈範として実効性を発動する。これは常識に反したことがらであるが、カントが問題にしていることは道徳法則を愛、友情、憐憫によって曇らせることなのである。赤の他人の幸福を守るといえども、それは自己愛を満足させるからである。「われわれは、善良であろうとすればするほど、他人を配慮すればするほど、嘘につく嘘の毎日を送らざるをえない」(中島義道,2005,100頁)という現実が、道徳法則の違背を阻む根拠である。むしろ愛していない人に、つまり「敵」に親切にすることが道徳的なのである(Vgl.*Kants　gesammelte Schriften*,

Ak版,Bd.XV,S,488.Nr.1096)。これが道徳的真実の極北であり、現実を秤量する重しである。

　しかるに左右田はむしろ規範的内容に、現実的負荷をかけて、両者のgapを収束せしめようとする。gapはgapとして残るのだが、当為に向けた現実のにじり寄る努力が追求される。裏返せば、現実が実質的内容をもった仮言命法によって、律せられることを意味しなかったのか。ここで厚生経済学の規範的な要請がすべて仮言的な条件に晒されていたことに思い当たる(鈴村興太郎の、非帰結主義者の定式化を見よ。鈴村興太郎,2009,第十三章)。実質に制約されている以上、gapの彼方にある当為は(超越〔論〕的論理学で妥当するとはいえ)、現実の側から、内容をもった当為は枠づけられている。観察者相関性が示唆するように、絶対的拘束を免除される所以である。はたして、絶対的拘束から離れた当為というものが、帰結主義的思考と一線を劃せるかは微妙な問題に違いないとはいえ、ここに「柔らかな道具主義」の固有の存在意義を見いだしたいと思う。

邦語文献

九鬼一人,2014,オンデマンド版『新カント学派の価値哲学』弘文堂。

左右田喜一郎,1972(←1918),「極限概念としての文化価値」『文化価値と極限概念　左右田喜一郎論文集第二巻』岩波書店。

「カント認識論と純理経済学」

塩野谷祐一,2002,『経済と倫理――福祉国家の哲学――公共哲学叢書➀』東京大学出版会。

鈴村興太郎,2009,『厚生経済学の基礎』岩波書店。

中島義道,2005,『悪について』岩波新書。

欧語文献

Dilthey,Wilhelm,Bd.24, 2004(←nach 1904),"Kritik der Erkenntnis- und Wertproblems bei 　H.Rickert und in der Phänomenologie", in:Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften, Göttingen:Vandenhoeck und Ruprecht, S.267-310.

G r1,1896-1902, Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine

logische Einleitung in die historischen Wissenschaften, Tübingen:J.C.B.Mohr.

Kant,Immanuel,1923,Anthropologie,in;Kant's gesammelte Schriften /

herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 15 ; Abt. 3 . Kant's handschriftlicher Nachlaß ; Bd. 2,,W. de Gruyter;Berlin,

Gr2,1913,Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine logische

 Einleitung in die historischen Wissenschaften, Tübingen:J.C.B.Mohr.

GE2,1904,2.verb. und erwit. Aufl.,Der Gegenstand der Erkenntnis:Einführung in

 die Transzendentalphilosophie,Tübingen: J.C.B. Mohr.

Rickert,Heinrich,1905, "Geschichtsphilosophie",in;Die Philosophie im Beginn des

20 Jahrhunderts,Festschrift für Kuno Fischer, Heidelberg:Carl Winter‘s

Universität-buchhandlung,Bd.II,S.51-135.

Rickert,Heinrich,1910(←1899), 2.Aufl.,Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft,

Tübingen:J.C.B. Mohr.

Rickert,Heinrich,1921,System der Philosophie,Erster Teil:Allgemeine Grundlegung

der Philosophie, Tübingen:J.C.B.Mohr.

Rickert,Heinrich,1924(←1912),2.umg.Aufl.,"Das eine,die Einheit und die Eins,Bemerkungen zur Logik des Zahlbegriffs", Tübingen:J.C.B.Mohr.

Sen,Amartya K.,1982,”Rights and Agency”,Philosophy & Public Affairs,Vol.11,

pp.3-39.